

## 「大学連携PJ」のこれまでの取組みと今後の展望

文 岡本 晋弥(協会理事)

2018年よりはじまった大学連携プロジェクトは、自然環境保全の次代を担う高校生・大学生・専門学校生を対象として、毎年保全協会の活動地にインターンシップ生を受け入れてきています。インターンシップでは、大阪各地での自然保護活動の運営と実践に参加することにより、大阪の自然環境の現状を知って学んで頂け、それを守る人々・グループを知りネットワークを広げていける内容となっています。更に、期間内に5回以上参加された方に、修了証明書を発行しているため、就職活動にも有利なものとなっています。コロナ禍で3年程は停滞期を迎えていましたが、その期間でも保全協会の活動地への若者の出入りが途絶えることはありませんでした。

**若者が保全協会の活動に参加している事例**

大学連携PJへの参加申請登録が最盛期だった2019年度でご紹介しますと24名の登録があり、信太山・紫金山・歌垣・共生の森・木津川・万博記念公園・三草山・鉢ヶ峰・城北ワンド・糞塊調査といったメニューを開催日も書いた表で示し、皆さんが自身で選択して参加してもらっておりました。

**環境事業協会での取り組み状況**

岡本が勤めている環境事業協会では、「学生ボランティア養成講座」という連続講座を令和3・4年度と立ち上げ開催しました。歌垣や富田林の活動地をフィールドの一部として講座の中で取り上げ、現地で実際に活動を体験できるよう運営をしました。令和5年度は講座名を変更して更に年齢層を拡大して募集は18歳

以上という大きな枠となりましたが、広報の中心が大学の学生なので、64%が学生という参加割合での開催となっています。結果、3年間で43名もの学生を自然環境保全の活動地へ誘致してきました。学生ボランティア養成講座の受講生の中には、講座修了後も現地へ行って活動を継続している人もおられ、狙い通りの期待できる結果となっています。

**参加に際しハードルになること**

やはり活動地内では活動家が皆高齢な雰囲気があり、1人で飛び込むことの抵抗があると考えられます。また、連続講座の流れがあるからこそ続けて参加できるものの、終わってしまえば一人で自発的に参加しにくい人が中には居るかと思われれます。

**解決策**

各シーンでアナウンスする時に、なるべく友達を誘って2人以上での参加をお勧めしています。また、各講座はグループラインで管理しており、講座終了後も岡本が入手した皆さんが興味ありそうな情報をそれぞれのグループラインに流すようにしています。実績で言いますと大阪自然史フェスティバルへの来場など積極的な参加がありました。

**今後の展望**

継続は力なり。保全協会の活動へ参加する若者が少しずつ着実に増えて来ているように感じます。このまま、少しずつでも増えていけば数年後には随分雰囲気が変わってくるのではないのでしょうか。



ネイチャーおおさか  
インターンシップ2023

# ICTが身近にある子どもたちと自然の距離の縮め方

文・写真 枝光 有美(海のふしぎ観察会・team.虹鰓)

## 現在の活動について

「海のふしぎ観察会」「魚へんに思う、ということ (team.虹鰓)」に参加し、主に春～秋は月に1・2回ほど大阪湾の観察会にスタッフとして参加させていただいています。子どもたちといっしょに海の生き物の観察や、漂着ごみや海洋プラスチックなどの問題について観察を通して考える活動をしています。

## なぜ観察会の参加をはじめたか

2020年3月から5月、新型コロナウイルス感染症対策のための全国一斉臨時休校のため、子どもたちが校舎内で授業を受けることができなくなってしまいました。当時小学校教員として理科を担当していましたが、休校中の子どもたちは家で先生たちから一方的に配信される動画を視聴し、課題に取り組むだけ。従来であれば植物が芽吹き、花を咲かせ、昆虫も活動的になるこの時期にたくさん外へ出かけ、「ふしぎだな、おもしろいから調べてみたいな。」と自然に対して興味を持ち、経験を重ねていく年齢で長時

間画面に向かって一人で過ごしていれば自然に対して愛着を持ちにくくなるのではないかと危惧しました。そのため、自分ができる範囲で自然との結びつきを強めたいと考え、調べているうちに偶然見つけた口座「子どもといっしょに自然のなかへ」を受講し、自然観察会に参加するようになりました。

## 同世代が観察会に

### 初めて参加するハードル

○「参加できる」情報が見つかりにくい  
私自身調べ始めてから講座を受講するまで、約9ヶ月かかりました。受講までの期間にも他の講座や観察会の参加を検討しましたが、「平日の活動である」ことや、「土日に開催されている自然観察会は子どもが参加する前提のものが多い」「年齢層が不明」「既に定員が埋まっている」「公共交通機関の利用だけでは現地に辿り着かない」などの理由から申込みを断念しました。また、自然史博物館の配布物や大阪自然史フェス、教員研修などで大阪自然環境保全協会の存在は知っ

ていましたが、実際に参加できそうな日時のは見つからず、いつか参加してみたいと思うばかりでした。「子どもといっしょに自然のなかへ」も初めに見つけたときは全日程の募集でしたので日程が合わず、見送りましたが、後日二日間だけ参加できるよう変わっていたため、申込みました。複数の条件が重なり、初めは参加しにくいと、対象が僅かであっても観察会の開催が多ければより幅広い人材が参加できると考えます。

## 自然観察会に

### 参加してみたい方々に向けて

参加したいという気持ちはあっても実際に参加できるものが見つからないこと、なかなか連絡する勇気が出ないなど、参加しない理由はたくさんあります。しかし、興味があるのに行動を起こさないままであれば、いつまでも変化は訪れません。1回だけでも様子を見に行ってみると、自分が本当にしたいことについて考えがまとまります。自分の好奇心に従って参加してみませんか？



写真-1 アマモ場で見られる生き物 (カニ)



写真-2 磯で見られる生き物 (ウニ)

## ビジョン委員会の取組み～「変えていこ!大阪人の自然観」プロジェクトの若者チーム～

文 具志堅 葉子(ビジョン委員会・理事)

ビジョン委員会では次の中期計画期(2024～28年)を、保全協会の実践内容を広く伝えることで、様々な人に働きかけ、結びつけ、会員の拡大による活動の拡大に繋げる5か年としたいと考えています。

そこで、広く様々な人が「身近な自然」についてどう考えているのか、どのような場であれば参加したいと思うのか、若者の参加に興味を持つ5人のメンバーが集まり、周りに聴き取り調査を行いました。

調査で見えてきた若者は、身近な自然にも興味があり、大自然や貴重生物の調査など特別で達成感のある体験や、SNSで発信できるような楽しい場などを求めていることが分かりました。そこで、参加者の得る物(達成感や発信できるなど)に着目して企画したのが13件の企画です(図)。

これは企画を選んでそのまま実施してください、というものではありません。若手不足で困っているグループも、このように広報や運営方法を変えるだけで若者は興味を持ち、まずは来てもらい会話することで担い手となる若者が定着するのではないかと、というご提案です。

ビジョン委員会では、全てのグ

ループ、部会、委員会に、次期5か年で行う企画と重点目標の提出をお願いします(11月20日(月)提出、別途依頼資料参照)。わからない、企画が立てられないなどはビジョン委員へお伝えください。依頼内容の説明から企画立案まで、ビジョン委員や若者チームが足を運んで一緒に考えていきます。

### ① 若者チームによる企画(都市部に暮らす20～30歳代向け)

形式	概要(具体例)	参加者の得る物
観察会	自然の恵みを味わう(山菜@里山、ピアガーデン@公園、語り合うバー)	食べる
観察会	チームワークで課題をクリア(自然の形や色や香り集め、レンコン掘り)	達成感
観察会	夜の観察会(魚やエビ@水辺、鳴き声や眼の光@森)	特別な体験
ツアー	自然の中で活動(トレイルラン&地産地消レストラン、自給自足@無人島)	特別な体験
観察会	里山作業体験(伐採&コースター作り)	特別な体験
観察会	自然のアーティスト(紅葉アート、写真撮影会、山に登って演奏会)	発信できる
観察会	昆虫の分類講座(様々な生きたカブトムシ)	発信できる
観察会	種を絞った観察会(粘菌、サシバ)	専門知識
講座	エコアップ技術講習(庭やベランダの生物多様性)	専門知識
講座	自然の現状を学ぶ(農村の獣害@ジビエレストラン)	専門知識
講座	生物多様性向上の手法を体験(伐採、炭焼、田畑、草刈り、植樹)	活動実績
ツアー	自然環境保全地域めぐり	活動実績
シンポジウム	調査成果発表会(調査地の生きもの比較)	活動実績

## OPEN20周年—若者との交流会 世代など多様性からの活動創造を

文 岡 秀郎(大阪府民環境会議理事・保全協会理事)

保全協会が加盟しているNPO大阪府民環境会議(OPEN)は今年設立20周年を迎えましたが、人材・組織の高齢化は否めません。でも、若者など新人材への承継意識は保全協会に比べて高く、6月23日の総会では、活動を次世代につなぐための「結成20周年のつどい—若者と環境団体との交流会—」を開きました。

OPENは、環境省きんぎ環境館の管理運営、共生の森づくり、天神

祭ごみゼロ大作戦、給水スポット普及などに取り組んできました。こうした創造的な活動を、新人材たちとどのように展開できるのか—梅田の会場には、OPENの理事・会員と、ハッピーアースデイ大阪や大阪公立大のV-Stationとエコロ助、大阪産業大の森・川・田んぼプロジェクトなどから33人が参加。活動を紹介・共有し、4つのテーブルで面談交流を続けました。

こうした異世代交流の意義は、①

団体などの閉鎖系から多極的多様性へ、まずは出会い、情報交換すること。また、②若者などの異世代に“上から目線”“要員扱い”で接するのではなく、協働姿勢で活動を見出すこと、そして、③これらを継続実践すること。新旧・世代交代というと、一部を排除する概念がありますが、そうではなく、それらの多様性を活かして活動を創造していくため、古い組織に巣食う“旧態依然”から抜け出すことが重要です。